

映画「少年時代」の県内ロケハンや少年捜しに走り回りながら、いつも頭の片隅にあったのは、県出身で原作者・漫画家・プロデューサーの藤子不二雄<sup>Ⓐ</sup>さんのことだった。映画の製作と富山でのロケは藤子不二雄<sup>Ⓐ</sup>さんが決行した。僕も「富山を舞台に映画を」の一言のために協力することを決めたのだ。

藤子不二雄<sup>Ⓐ</sup>さんに初めて会ったのは平成二年、「少年時代」の完成披露サイン会だった。同席された篠田正浩・岩下志麻夫妻の元気な姿に比べ、秘書役のお姉さんと連れ添って現れた藤子不二雄<sup>Ⓐ</sup>さんは「映画をつくった」という華やいた印象が感じられなかった。

この時は「少年時代」のプロデューサーで、本名の安孫子素雄<sup>Ⓐ</sup>さんの印象が強かった。富山での撮影現場には必ず安孫子プロデューサーの姿があった。安孫子さんは篠田監督とカメラの後ろで、いつもじーっとロケ現場全体や監督、スタッフの動きを見つめていた。一瞬、総監督のように思ったこともある。篠田監

## 安孫子素雄さん

「少年時代」の映画化に情熱を傾けた藤子不二雄<sup>Ⓐ</sup>さん



督は映画をつくる職人集団のボスというのが実感だった。

サイン会で受けた印象は、この年の夏、婦中町の「いこいの村富山」で開催する映画観賞団体全国連絡会の全国映画・映画大学の基調講演を映画プロデューサーとしての藤子不二雄<sup>Ⓐ</sup>さんに依頼していたからかもしれない。

キネマ旬報の三年二月下旬号で、篠田監督は読者賞第一位を受け、次のようにこたえている。「映画『少年時代』は藤子<sup>Ⓐ</sup>氏の情熱と責任において生まれ生まれた作品が『少年時代』だったのである。もしかすると藤子不二雄<sup>Ⓐ</sup>監督の『少年時代』が誕生していたかもしれないのだ。」

やはりそうだったのだ。藤子不二雄<sup>Ⓐ</sup>さんの情熱と責任において生まれた作品が『少年時代』だったのである。もしかすると藤子不二雄<sup>Ⓐ</sup>監督の『少年時代』が誕生していたかもしれないのだ。

テーマソング「少年時代」の井上陽水さんの歌声を聞きたびに、この映画の成り立ちの不思議さが頭を駆け巡るのである。

# 撮影現場には必ず姿